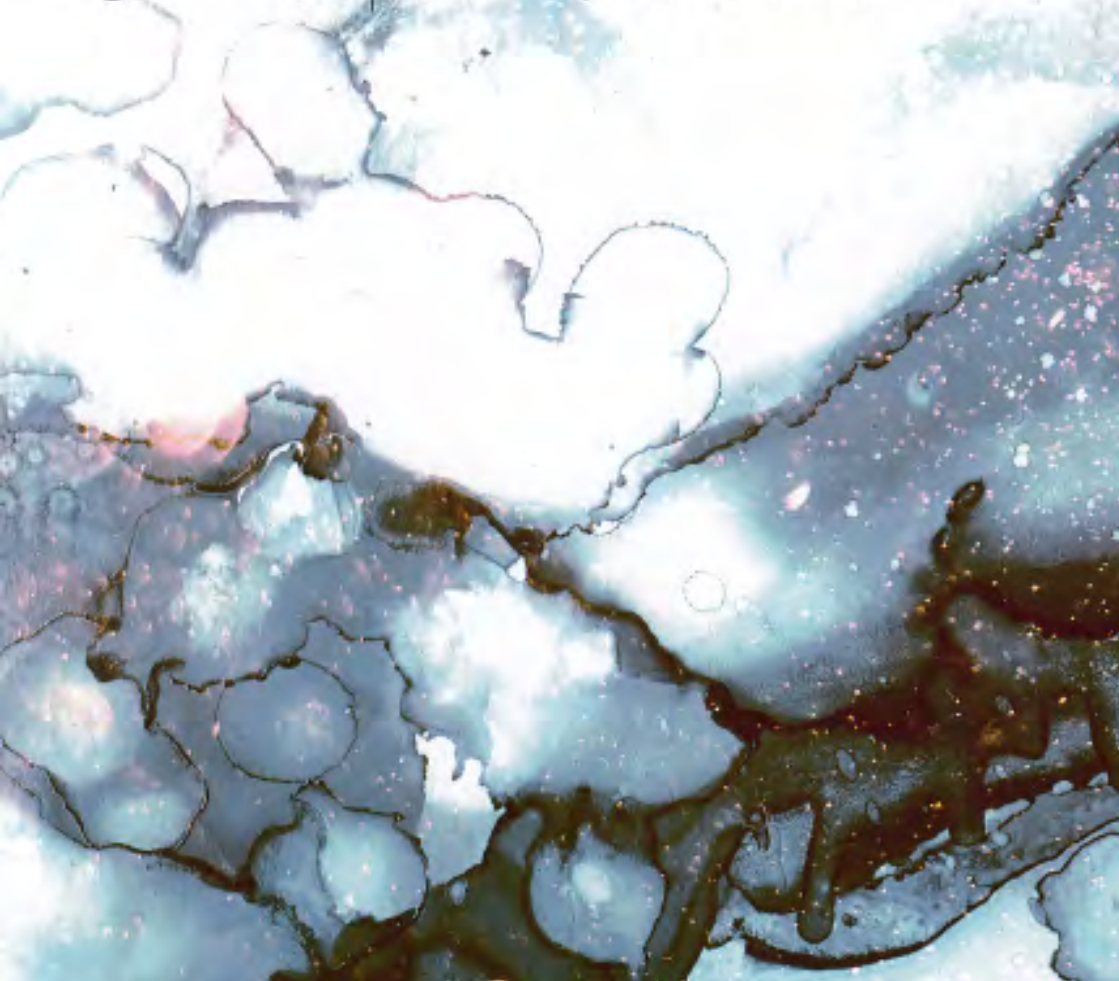


船 団

第 117 号

特集

山が呼んでいる



松永 啓子

ふふふんと鼻歌作る春隣

水色のリボンを結ぶ春隣

早春の宅急便が届く朝

早春をポケットに入れ駆け足で

春愁やクレパスで描くハートチョコ

春愁をふくらはぎだけ知っている

足音も吸い込む砂丘の斑雪

松永 みよこ

下萌えの恋と気づかぬ思いかな

犬ふぐり思考回路をくすぐりぬ

春ごたつ柔よく剛を制したり

春眠す本当の我となる日まで

いら立ちの中にぼちんと下萌えぬ

君たちはどう生きるかと春の泥

初雪や抒情の調べはじまりぬ

●会員作品●

松本 秀一

雲浮かび音符のやうな吊し柿

やつて来る人も海鼠も年の暮

ほろ酔うて瞬き二つ初御空

雪がつむ猥雑な色消しながら

横向けの雀にふれる春の雪

斑雪ぐぐつとぐーぐー腹の虫

ふるさとを離れる靴と春の雲

三池 しみず

林檎むく美しき手の美大生

冬うらら欲しいバカラのスノーピー

雪道にイケメンモデル靴汚し

恋人も愛人も捨て雪女

毛糸玉くわえて蹴って犬笑う

冬眠のクマになりたい日もあるさ

バレンタインデー君のモチ期はいつだった

みさき たまゑ

年賀状犬猫嫌いでなぜ悪い

大寒の踏切回送電車行く

冬ぬくしムスメのムコはひきこもり

駐車場裏にあります日向ぼこ

もつれあう電源コード針供養

早春のサービスエリア手をのばす

浅き春お捻り数多村芝居

水上 博子

月失いし一刻の寒さかな

24時間繋がれ繋ぐ寒さかな

ルビコンを渡った後の寒さかな

ライターの火色にゆるむ寒さかな

春炬燵ゆるゆるローマ人の物語

春浅き舞台演じる高校生

春の句は月夜の電信柱より

● 会員作品 ●

三宅 やよい

煮凝りぬテーマパークの片隅に

成層圏より地吹雪見えますか

踊り場に腰を下ろして猫柳

耳失せて蛇穴を出る昼下がり

春はあけぼの西川ローズ羽根布団

口あけて光さしこむ孕鳥

溶け残るバターのような花疲れ

宮崎 亀

ジャツカルへ暗号街は落葉期

落葉期順番が来て焼香す

マニキュアの爪かもしれぬ鎌いたち

樹氷林すれちがいざま故人なる

根の底に熊を眠らす大樹かな

湖の生まれ名はよごとという雪女郎

次々と難癖つけてちゃんちゃんこ

つじ あきこ

冬青空映すウインドーシヨツピング
鬼は外お福もついて行きたがる
気を許し心を許し日刺焼く
竜天に夢の続きは夢の中
友だちと春光分かち合うところ
春光の丸椅子マカロン丸畳
春の朝ならえ右！消防車

津田 このみ

如月の大開脚の赤子かな
寒卵食うたび月の錆びつきぬ
駅名の二文字ばかりや春の旅
かの人の爪のようなる桜貝
春の雪鼻と鼻とでする挨拶
げんげ田に健気なるべし足の裏
マザコンとばうむくーへん春の昼

● 会員作品 ●

津波 古江津

おならぼつと晩秋のよしなしごと
冬のはじめのねむいねむい貨物船
ひいらぎの花日没にすこし間がある
火の番が遠くから来る名を呼べば
極月の水飴いやだいやだと云う
来年の手帳にわらうブルドッグ
赤ん坊のことばの部屋か寒ゆうやけ

坪内 稔典

荒星の一粒奮え恋人よ
梟の一族かヤツ手がぬくい
雑煮とか象の鼻とか土鈴とか
寒晴れの男はいいぞ河馬だつて
寒晴れは一休さんの音である
島々はポツとかヒョツとか風光る
風邪声もいいな窓辺に猫柳

中居 由美

初句会机に種を蒔くように

小説は佳境しばらくどんど焼き

日脚伸ぶかつてカレーを食べし匙

母の畑父の畑の莖立てる

春の雨マントルピースに本伏せて

白椿のひとつは空の落とし物

木の芽風きのう生まれてきたばかり

長沼 佐智

がやがやと君等大股小豆粥

水仙に賽銭あげて戻り橋

転び方安全でした直滑降

如月の色は紫式部色

膝の猫居すわって居り春の風邪

秋高しまたとがらせるHB

重版を窓際に繰る梅雨晴間

● 会員作品 ●

中原 幸子

春昼の待つともなしに待つメール

落ち椿ぼとり信号待ちですか

しゃぼん玉飛んだ日母が動いた日

たくあんの輪切りポリポリ春は遅々

春風と社交ダンスは二階です

合歓の空おはようさんは透明に

今朝の秋聞く耳一歩遠ざかる

梨地 ことこ

遠いなあカバの背中と綿虫と

冬麗やガラスのなかに載金の声

生牡蠣を啜りにっこりアマテラス

鳥肌立つ裸婦へちいさく「あと二分」

返り花8864傾いて良し

白梅のこの漢詩的自然観

春のカモたぶんだぶんと平和の形

原 ゆき

寝て覚めて浮寝鳥見てまたも寝て

空欄の空つぽは濃し浮寝鳥

玉砂利を盗み聞きして冬日和

梅はなびら世界とのきわあかりめく

梅一輪にゆにゆつと樹皮を押し分けて

部屋青く梅と浮力の関係性

全身で憎みぬ花の雨の照り

阪野 基道

大坂に心中あまた野火に舌

青鮫に父子三代が口を開く

愚き物を一つ落として春遊行

母親の美貌が不満絵踏の目

乳いろにかすむ裸身よシャバダバダ

蝙蝠の翼ひろげて問氷期

はぐれない、ように端持つ蝸蚪の紐

●会員作品●

東 英幸

沖を見て人恋しくて火恋し

元号のいくつを生きて寒の水

電話ボックス営業してます十二月

ハンゲル語漂着したる冬の月

初明りあなたは狐なのですか

人日の浜の鴉を厭きず見る

不器用に生き関東ネギをぶつ切りに

火箱 ひろ

心臓の小っちゃな一家ちゃんちゃんこ

空青く頭からつぽ小六月

光るおむすび冬の日差しの中ふたり

ペリットの骨の一片冬木に芽

書き初めの初志貫徹が横たわる

籠るならさくら色した寒卵

春きざす象が浮き足立っている

陽山道子

馴れ初めは白い山茶花揺れている
冬が来る曇りガラスの指の跡
冬日和ひらり殺陣師と極楽寺
冬の夜ネジ緩くなるオルゴール
クリップで止まる止まらぬ牡丹雪
道連れの春の三日月そして鼻
春三日月女子パシユートの足六本

平井 奇散人

飛び跳ねて猫追いかける瑠璃蜥蜴
ジャズナンの鐵もダンディーかんかん
蝙蝠がふぎらふぎらと囃してる
二十一世紀菌は二十本柏餅
夏畑忍耐強い普通人
地球儀をポンと叩いて生ビール
突然にメール途絶えた夏の暮

● 会員作品 ●

福岡 貴子

腸もまっすぐである秋刀魚焼く
編目一つ落として戻る夜長かな
弟もその子も呑気竜の玉
綿虫や異国になじむ大阪弁
そぞろ神近寄る気配日脚伸び
到着前少し揺れます次は春
「十秒前！」スタートラインに春が立つ

ふけ としこ

カーテンの冷えきる家へ戻りけり
蜜柑置く町内工事計画書
黒く来て黒く去る鳥春浅し
梅咲いて鮫も兜太も今は在らず
梅が咲く掃除半ばのままにして
黒松の肌の深きへ春埃
水引の結びの固し夕長し